



桐生ロータリークラブ週報

2008年

国際ロータリー第2840地区 2007-2008年度 国際ロータリーのテーマ



ROTARY SHARES

R.I 会長 ウィルフレッド J. ウィルキンソン

善意というものがいいなら
ロータリークラブは唯の社交クラブだ。
職業は金儲けのためでしかなく、
社会奉仕というも施しにすぎず、
国際奉仕は外交以外の何ものでもない。

パストガバナー 前原勝樹

会長 佐々木 裕 幹事 森 末廣

クラブ会報・広報委員会 園田 誠・吉田和夫・清沢元喜

6月16日号

第2656回例会

(6月9日(月) 第2例会)

- | | |
|---------------|---------------------|
| 1. 点鐘 | 6. 委員会報告 |
| 2. ロータリーソング齊唱 | 7. 卓話 「新会員卓話」 奥澤公慶君 |
| 3. 来訪者紹介 | 山口和男君 |
| 4. 会長の時間 | 8. 点鐘 |
| 5. 幹事報告 | |

ようこそビジター

〈米山奨学生〉ヤオ、クアディオ・ジェマエル君

会長の時間

この処毎日むし暑く、うとうしい日が続いております。東京秋葉原では余りにも悲惨な事件がおこり、毎日の様にテレビや新聞等で今までに考えられなかった事件が多く感じられ、日本の将来が気がかりであります。

6月のガバナー月信に横山ガバナーが「梅雨の季節とは裏腹に、私の心はやっと晴れ間が覗いて来ました。」一年間、地区内の皆さんに心から感謝とお礼を申し上げます。と記しておりますのでご報告を申し上げておきます。

6月3日(火)第4回クラブ協議会を美喜仁さんにて開催致しました。今年度最終のクラブ協議会で新旧の役員引継ぎが無事終了し、その後懇親を大いに深めました。

6月11日(水)今年度最後の次年度への引継ぎの家族会役員会が泉新にて開かれます。同日、5RC会長・幹事会も開かれます。これも次年度への引継ぎの最終の会長・幹事会で、いよいよ横山ガバナーと同じく梅雨の晴間が覗き、肩の力が抜けて来た感じが致します。

幹事報告

- 桐生市長より、桐生市立図書館への図書寄贈に際する感謝状が届いております。
- 桐生南、桐生西、桐生中央、桐生赤城の各RCより週報到着。

委員会報告

出席委員会

本日の出席(平成20年6月9日)：総員69名・出席48名
平成20年5月12日例会修正出席率：80.6%

ニコニコボックス

奥澤公慶君・山口和男君…卓話をさせていただきました／佐藤富三君…2655回例会の卓話をさせていただきましたので／下山嘉一郎君…結婚祝／山崎達也君・川村 隆君…誕生祝／下山嘉一郎君…先日は佐々木会長様、森末廣幹事様にわざわざお見舞にご来宅いただきありがとうございました。／藤井征夫君…佐々木会長1年間ありがとうございました／森 末廣君…太田支店の地鎮祭が無事終了致しました。前原宮司に大変お世話になりました。／阿部高久君・前原勝君…写真を戴きました。

例会場 桐生俱楽部 TEL45-1513 例会日 毎月曜日 12:30PM
ホームページ <http://www.kiryu-rc.org> メール info@kiryu-rc.org

ロータリー財団委員会 仔豚の貯金箱 森 末廣君

卓 話



「新会員卓話」

伊勢神宮式年遷宮について

奥澤 公慶君

今、私達神社関係社が取り組んでおります伊勢神宮の式年遷宮についてお話をさせていただきたいと思います。

伊勢神宮は天照大御神をお祭りする皇大神宮(内宮)、豊受大御神をお祭りする豊受大神宮(外宮)、そして荒祭宮、風日祈宮、多賀宮など十四の別宮、摂社、末社、全てで百二十五の宮社からなっております。

皇大神宮の祭神、天照大御神は古来歴代の天皇によって皇居の中で祀られていました。これを「同床共殿」といいます。その後、神様と人、神様と政治を別々にすることになり、崇神天皇の御代に皇居の外、大和の笠縫邑に神籬を立ててお祭りされました。そして皇女豊鍬入姫命が天皇にお代わりして皇大神宮をお祭りされ、初代の「斎王となられました。

斎王とは古代から中世にかけて存在した制度で未婚の皇族女性が選ばれ神宮を祀る役を務められました。

その後、垂仁天皇の御代になり、斎王となられた皇女倭姫命が新たに皇大神宮をお祭り申し上げるにふさわしい宮地を求められ、大和の国を始め、伊賀、近江、美濃の諸国を巡られた後、伊勢の国度会の地、宇治の五十鈴川の川上に到着し、今から二千年前まえに皇大御神の教えのままに皇大神宮(内宮)を創建されました。その後、五百年たち、雄略天皇の御代になり、豊受大御神をお祭りする豊受大神宮(外宮)が創建されました。

そして神宮の祭りでありますが、神宮の祭りは遷宮祭、臨時祭、恒例祭の三つに分けられており、遷宮祭は二十年に一度、御正殿をはじめ御垣内の諸殿舎をすべて新しくお建て替えし、正殿内の御装束、神宝を全て新しく調べて、新しい御殿へ大御神さまをお遷りいただくおまつりであります。神宮の諸祭のうちで最も重要なお祭りが遷宮祭であります。

臨時祭は、皇室や国家の重大事に行なわれるおまつりで、両陛下のご参拝は、平成の御代に三回ございまして、一つは「即位の礼、大嘗祭御報告の参拝」、もう一つは「第六十一回神宮式年遷宮後の新宮御参拝」、もう一つは「三重県下地方事情御視察に際して」の時であります。

恒例祭は、歳旦祭、建国記念日、祈年祭、月次祭、神嘗祭、新嘗祭など十四のお祭りがあり、そのうち、神嘗祭、六月、十二月に執り行われる月次祭を三節祭といい、これに祈年祭、新嘗祭を加えて五大祭といわれております。

五大祭には天皇陛下から幣帛が奉られる奉幣の儀があり、神嘗祭、祈年祭、新嘗祭には勅使が参向されます。

私もこの五大祭の内新嘗祭に十年ほど前にご奉仕いたしました。これは斎主の池田厚子様、大宮司、小宮司様を始め、神宮の禰宜、権禰宜の神職と私達の全国から選ばれた神職数名が加わり執り行われます。私も神職生活の中で思い出に残るご奉仕でした。ちなみに戦後の斎主様は北白川房子様、鷹司和子様、池田厚子様であります。

それでは、今取り組んでいる第六十二回式年遷宮について申し述べたいと思います。二十年に一度執り行われる式年遷宮は、今から千三百年前に天部天皇のご発意により始まり、持統天皇四年(609年)に第一回の式年遷宮が行われてより平成五年の第六十一回の遷宮が行われてきました。

長い歴史の中で2度滞ったことがあります。それは、戦国時代の時と戦後24年に執り行われるはずの遷宮が四年遅れて28年に執り行われたことです。これらにはそれぞれ、大変な理由があるわけですが、前者は、日本中が戦乱の時代で建て替えを費用もままならないときで、このとき修理を重ねてましたが、遷宮復興に尽力したのが、慶光院上人という尼僧であります。そして慶光院上人は遷宮にかかる費用を全国行脚し、つなりました。そして織田信長や豊臣秀吉がこれにこたえ遷宮復活をはたしたといわれております。

そして江戸時代に入ると徳川家康は、信長、秀吉が式年遷宮に寄せた熱意を継承し、式年遷宮費用は幕府の負担、ただし御用材は尾張藩の負担と定めたと神宮史の中に書かれております。このように幕府が定めしたことにより江戸時代は、おかげまいり、ぬけまいりとかいわれ、たくさんの参拝客が神宮にお参りし、その数が多いときは年間600万人も人が参拝したとあります。当時の日本の人口が2千万人といわれるなか、国民の約三割の人が参拝したわけで驚くべき参拝者数であります。

後者は、戦後、神道指令によって神宮も国家から離れ、一宗教法人になったため、今まで国替えを以って行なわれていた遷宮が、神宮だけで行うのは、非常に困難をきわめたため、延期せざるをえませんでしたが、全国の神社、そして国民の奉賛会を中心となって四年遅れ、昭和28式年遷宮が行われました。

それでは遷宮について説明したいと思います。

◎式年遷宮とは

式年遷宮の制度は、今から約1300年前に第40代天武(てんむ)天皇がお定めになり、次の第41代持統(じとう)天皇の4年(690)に皇大神宮の第1回目の御遷宮が行われました。以来長い歴史の間には一時の中断(戦国時代)はありましたが、20年に一度繰り返されて、来る平成25年には第62回目の御遷宮が行われます。

遷宮とは、新しいお宮を造って大御神にお遷(うつ)りを願うことで、式年とは定められた年を意味します。神宮には内宮・外宮ともそれ東と西に同じ広さの敷地があり、20年ごとに同じ形の社殿を交互に新しく造り替えます。また神様の御装束神宝も新しくされます。

◎なぜ20年ごとか

なぜ20年かという定説はありませんが、その理由

はいろいろ推定されます。まず20年というのは人生の一つの区切りとして考えられるでしょう。また、技術を伝承するためにも合理的な年数とされていますし、掘立柱に葺(かや)の屋根という素木造り(しらきづくり)の神宮の社殿の尊厳さを保つためにもふさわしいとされています。他にも中国の曆学から伝わったという説などいろいろあります。

しかし、神宮の式年遷宮は建築物の朽損(きゅうそん)が理由ではありません。この制度が定められたとき、もう奈良の法隆寺は建てられていました。法隆寺は現存する世界最古の木造建築です。当時の技術で立派に永久的な社殿はできたはずです。

神宮の「唯一神明造(ゆいいつしんめいづくり)」は、いつでも新しく、いつまでも変わぬ姿を求めて、20年ごとに造り替えることにより永遠をめざしたのです。世界中には永遠をめざした石造の古代神殿がいくつもありますが、世界の建築家や文化学者が「伊勢は世界の建築の王座だ」と絶賛します。それは、原初のスタイルがいつまでも、どの時代にも存在し、今も昔も変わぬまま毎日お祭りがなされているからです。

20年ごとに生まれかわるという発想、これは世界のどの国にも見られないものです。しかも、神宮が新しくなることで、大御神の、より新しい御光をいただき、日本の国の「イノチ」を新鮮にして、日本全体が若返り、永遠の発展を祈るのです。

そこには、常に若々しい生命の輝きを求めて止まない日本の民族性を伺うことができます。

◎用材はどれほど必要か

新たに造営される殿舎は、両宮正殿、宝殿外幣殿、御垣、鳥居、御饌殿、十四別宮等諸殿舎計六十五棟に及びます。

遷宮に必要なご用材(檜)の総材積は約8500立方米です。なかには直径1メートル余、樹齢400年以上の巨木も用いられます。

屋根に葺く葺(約2万3千束)も神宮の葺山で10年かかりで集めます。かつては神宮備林が木曽の山にありました。今は国有林となり、次第に檜の良材を調達することも困難になっています。そこで神宮では、大正時代の終わりから両宮の宮域林で200年後の御用材の確保を目標に檜を育成しています。

宮大工やお屋根を葺く葺工もその養成が課題となっています。

◎文化的意義

式年遷宮では、約800種1600点の御装束神宝を古式により新しく作り殿内に納められます。古代のままに、その時代時代の最高の刀工、金工、漆工、織工など美術工芸家によって調整されています。

しかし、太刀(たち)の原料の玉鋼(たまはがね)、染色料、国産絹糸等御料の入手が難しく、砂鉄をタタラで操作する和鉄精錬の技法の継承者も少なく、草木などを用いる染色家、錦織や組紐などの技術者も後継者が実に困難状況になってきてています。このような中で、20年毎に繰り返す仕事によりこれらの技術も受け継がれて来ました。また、わたしたち日本人の生活や社会を支える文化も同時に育くまれて来ました。ここにも遷宮祭の意義があると思います。

現在、第60回神宮式年遷宮の付帯事業として設立された財団法人日本民族工芸技術保存協会では、こ

れらの御料の確保と技術者の養成などに努力されています。

◎費用について

神宮は天皇がおまつりされるお宮ですから、戦前までは神宮で最も重儀とされる式年遷宮は国をあげての最大のお祭りとされていました。しかし、戦後は制度の変革により政府の手を離れましたので、国民のまごころの結集による淨財によってご奉賛申し上げることになりました。

平成5年の第61回式年遷宮の経費は327億円でした。

第62回式年遷宮の経費については、経済動向が不透明な今日、長期に亘る見通しを立てることは困難ですが、前回の実績を踏まえて伝統技術の継承に掛かる経費増などを考え、一応現時点で約550億円が試算されています。しかし、正式な総経費については今後の検討を待たなければなりません。

◎とりこわした古材や撤下の神宝類はどうするのか

神宮といえばまず思い起されるのが、五十鈴川とその川に架かる宇治橋です。宇治橋には、前と後に2つの大きな鳥居が建っています。この柱は、内宮と外宮の御正殿の棟持柱(むなもちばしら)として20年間使われたものを、削りなおして再利用しています。そのまた20年後は、昔の伊勢街道の入口、関の追分と桑名七里の渡口の鳥居として、20年間再々利用します。その後も関の場合、氏神・春日神社の御手洗の柱や屋根の修繕に用い、まったくムダなく活用されています。これは一例でほかの古材についても、古来から由緒の深い全国の神社にむだなく用いられます。

撤下したお装束や神宝は、明治以前には燃えるものはお焚き上げをし、ほかは土中に埋めていました。神様がお使いになった御料(ごりょう)だから、他に用いることは畏れ多いと考えたからです。しかし、今日では保存し、一部を神宮の博物館である神宮微古館(内宮と外宮の中間、倉田山にあります)で常時展示しています。





「新会員卓話」
ラグビーフットボールの歴史

山口 和男君

ラグビーの起源は、「1823年、イングランドの有名なパブリックスクールのラグビー校でフットボールの試合中、ウィリアム・ウェップ・エリスがボールを抱えたまま相手ゴールを目指して走り出した」とことだとされている。1840年ころにはボールを持って走る「ランニングイン」が確立し普及したのは確かだが、その第一号がエリス少年だったかどうかは諸説ある。しかしエリスが最初にボールを持って走ったという証言が記載してある文章がラグビー起源を調べる上で最古の文献だということは間違いないし、起源たる発明者の対象として名前が分かれている人物はエリスただ一人である。

なお、当時のフットボールは手を使うこと自体はルールとしてそれ以前にでも許されていた。エリス少年がルールをやぶったとされるのはボールを手で扱うことではなく、ボールを持って走った行為。エリス少年自体は実在の人物で、1806年にマン彻スター近郊で生まれ、ラグビー校では少なくとも3シーズン、フットボールをプレーしている。オックスフォード大に進み、卒業した後は牧師となり、病気療養のために渡った南フランスで没したことが確認されている。享年65歳。

ラグビー校では、ラグビーのルーツ以外にも多くの習慣が生まれており、イングランド代表の白いジャージの元になった白いシャツとショーツと紺色の

ストッキング、ハーフタイムにサイドをチェンジする習慣、インターナショナル代表がかぶるキャップ、H型のゴールポスト、楕円球のボールなどラグビーの起源を示すような証拠が多くこの学校から生まれている。

当時はまだサッカーというスポーツは確立されておらず、サッカーとラグビーは未分化であったので「原始フットボール」となる。この「原始フットボール」とは中世イングランドに起源をさかのぼる。数千人の大人たちが手と足を使って町と町の対抗戦として原始的な「フットボール」を行っていた。1点先取りで勝負を決めていたことから、長時間続けるために得点するのを難しくしようとオフサイドが生まれ、今日のラグビー、サッカーにもルールとして生き残らえている。試合は祝祭でもあり、死者も出るほど激しかった。19世紀に入り、ラグビー校やイートン校、ハロー校などパブリックスクールでは学校ごとの独自のルールでそれぞれのフットボールを行っていた。それぞれ学校で違うルールの統一を目指した協議は長く行われたが、1863年にロンドンで最終的なルール統一を目指した協議が開催された。しかしこの協議は物別れに終わった。これはのちのラグビーとサッカーが分岐した瞬間でもあった。そして1871年、サッカーのフットボール・アソシエーション1863年設立に対抗して、ロンドンでラグビー協会(ラグビー・フットボール・ユニオン)が設立された。

*** お知らせ ***

| |
|--|
| 【次回最終例会予告】 6月23日(月)卓話 <ul style="list-style-type: none"> ・会長 佐々木 裕君 「一年を振り返って」 ・幹事 森 末廣君 「一年を振り返って」 |
|--|